

シンポジウム

「家族看護実践における文化的能力」
～笹神地区 40 歳代男性の家庭訪問をとおして～

新潟県阿賀野市基幹型在宅介護支援センター

保健師 関川 清美

1、阿賀野市の概況（笹神地区の概況と健康問題）

笹神地区は、2004年4月に近隣4町村が合併し、阿賀野市となりました。人口約48,500人の市として新たな出発をしました。

笹神地区は、蒲原平野の南東部に位置し、2,000ヘクタール余りの水田が広がる県内有数の穀倉地帯です。1990（平成2）年には、「ゆきの里ささかみ」宣言を行い、本格的な有機農業に取り組んでいます。首都圏生協との交流も盛んに行われ、安全・安心の農業に力を入れ、基幹産業を守ろうとする活動があります。しかし、農業以外の収入を得ることは難しく、経済的には豊かな地域ではありません。

年間出生54人 死亡103人（平成16年度）高齢化率27.6%です。市の中では少子高齢化が進んでいる地域です。

笹神地区は1983（昭和58）年、脳卒中死亡率が県内でワースト2と報道されました。管内12市町村の中でも基本健診受診者は最下位の状況でした。

2、疾病中心の見方から暮らしを聞く訪問活動

笹神地区の健康課題は、若年者の脳卒中発症をどう防いでいくかでした。私達は、倒れる事実は分かっていたが、その人が、健康なときどんな生活をしていたのか、倒れる背景にある労働のことなどまったく分からず、退院後の保健指導は、疾病予防に徹した関わり方をしていました。

働き盛りと接点を持つ目的で、「40歳代男性の家庭訪問事業」を実施し、保健指導や病態中心の見方ではなく、とにかく分からない事実を「聞く」訪問を実施しました。

3、個別の保健指導から家族・地域を丸ごと見ていく視点

40歳代訪問は、あえて春の農繁期をねらい、本人に会えるよう工夫しました。実際は本人に会えるのは2~3割と少ないです。時には、田んぼのあぜ道に腰掛け農作物の出来具合や労働の実際などに触れながら、「職場の健診内容、農業問題、高齢者の介護の大変さ、子供の教育・子育ての問題」など、これまでの疾病中心の保健指導の枠では聞けなかった事実が明らかになりました。

はじめは、40歳代の調査訪問で終わっていたのが、40歳代をひとつの切り口として、父親の労働形態が家族の健康に結びついていること。世代ごとの食生活の問題。子供の生活リズムの乱れも父親の帰宅時間と大きく関係していることなど。家族単位の見方が出来る様になりました。そして、これらの問題は、個人レベルの問題ではなく、地域の問題としての視点が育ちました。

4、より広い視野にたった住民との接点

地域には、乳幼児から高齢者、障害者から健康者と様々な人たちが暮らしています。その暮らしと関係している病気は単に医学や看護学だけではなく、社会、歴史、民俗、経済、労働、時の政治と絡んでいます。保健師の文化的能力とは、「すべてが関連している総合的視野」にたったアプローチをしていくことだと思います。それは、母子保健や成人保健という細分化ではなく、丸ごと地域を見ていく全体化、統合化だと思います。（一部、手島幸子氏「保健師が行う家庭訪問」より引用）フィールドワークとしての見方を構築していくことが大切だと思います。